

## 巻頭言

卑近な例で申し訳ないが、筆者と本学紀要との付き合いは、平成2年に投稿したジャポニスムの建築に関する論考からはじまる。最初のころは、何を紀要に書くかということあまり深く考えなかった。そのときに書けるものを投稿していた。しかしながら、筆者がここ10年間にどんなテーマで書いてきたのかを振り返ると、世界遺産に関するものと、歴史的建造物の調査報告に関するものがほとんどとなった。

世界遺産に関する論考には、筆者の本学での講義科目である「世界遺産の建築学」を補完するという意味を持たせている。他方、歴史的建造物の調査報告は、建築史を専攻する者としての活動記録という意味があり、学生が調査に参加した場合は広く学内の学生にも興味をもってもらいたいという願いで書いている。それが筆者の紀要へのスタンスであり、今では紀要に投稿する内容を意識して書くようにしている。

現在(8月)、筆者の研究室では世田谷区太子堂2丁目にある昭和初期に建てられた民家の実測調査をしている。年内に取り壊されることになったため、記録として残しておくため、昭和初期の建築文化を見直してみたいためである。

平屋で、西に玄関を取り、その脇に両開きの窓を持つ洋間がある。南側に和室が並び、その前に内縁の廊下が走る。北側には中廊下を挟んで女中部屋、台所、風呂を設けるという大正期から昭和にかけての典型的な間取りを持つ民家である。

しかし、洋間を除いて改造は著しく、和室の一つはガレージとなり、部屋を仕切る壁や小壁はなくなり、畳は撤去されて板敷きになっている。中廊下はなぜか土間に変わっている。このように変貌は著しいが、柱に創建時の様子を伝える痕跡が残っている。例えば貫穴と小舞穴があれば、そこはかつて土壁で仕上げられていた証拠となる。その種の痕跡をすべてチェックしてもととの間取りとその仕上げを推察する。

今夏は大変な猛暑であるが、この民家を創建時の姿に戻すデータをとるために、研究室の学生はみな熱心に実測調査に参加している。あとで実測の数値がおかしいと思われるときは計りなおしている。ときには床下に潜り込んだり、天井裏に入ったりする。フィールドノートには汗が滴り落ちる。ようやくデータがそろってきた。それをもとに皆で復原模型の制作に取り掛かっている。

紀要の目的は、むろん大学での研究活動を内外に示すことにある。昭和戦前における世田谷の建築文化を胸に刻み、猛暑の中で調査した思い出を学生と共有するために、次の機会に書くことにしよう。

(堀内 正昭)